

主任 田澤 真也子

部員 高瀬 美千代, 葛西 航

目指す児童の姿

言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童

国語科における納得解を導く姿を「言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童」と設定し、研究に当たる。

I 目指す児童の姿について

1 具体として

(1) 「言葉の力」とは

「言葉の力」とは、自分の思いや考えを他者に伝える力・思いや考えを捉えたり深めたりする力・自分の思いや考えを新たに生み出す力のことを指す。この三つの力を児童に自覚させることを目指す。

(2) 「言語生活に活かす」とは

「言語生活に活かす」とは、獲得した学びを、単元を越えたり教科を横断したりして活用できることである。解釈を表出したり、詩や俳句、報告文、感想文を書いたり、スピーチをしたりする際は、その目的に応じて情報を選択し、技法を意識した読み方や書き方、話し方・聞き方をしなければならない。そこで、自分だけでなく、他者と解釈や表現を比較等させていく過程で言葉に着目させていく。そうすることにより、言葉の力を自覚し、学んだ読み方や書き方、話し方・聞き方を意図的に自らの言語生活に活かす姿につながると考える。

II 成果と課題

一年次は目指す児童の姿を、言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童とし、単元計画の工夫と目的や相手を意識した対話の二点を研究内容として研究を進めた。

成果は、児童が見通しをもって学習に取り組むことができたこととこれまでよりも目的を明確にした対話ができただことである。児童のつまずきから課題を見いださせたことが学びの必要感につながり、それが単元計画にも活かされた。また、対話の観点を教師がはっきりと示したことで児童の目的意識が高まり焦点化された対話となった。

しかし、以下二点の課題が残った。一点目は、他者を意識した対話にまで到達できなかったこと、二点目は、児童が学びを自覚できるような振り返りになっていなかったことである。

III 研究内容について

言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童の姿の具現化を目指し、「他者を意識した対話」「学びを自覚する振り返り」の二つの視点を踏まえた授業づくりを行うこととする。二年次は研究内容として以下の二点に取り組む。

1 他者を意識した対話

対話的な学びの場面で目指すのは、思いや考えを広げ、深めることである。対話の相手は教室内に限らず、発達段階に応じて、作者・筆者等も想定する。このような対話過程において自分との対話、いわゆる自己内対話も行っていく。それらの対話の中で新たな解釈や表現等の納得解が作られていく。新たな解釈や表現とは、全く異なる解釈や表現のみを指すのではなく、自身の解釈や表現が強化され確信することも含む。そのため、この対話的な学びを実現させるためには、自他の解釈と表現等とをすり合わせていくことが必要になる。その際、比較や類推等の手立てを用いて観点を明確にした対話を設定していく。

こうした学習活動を通して、自他の考えをすり合わせ、共感し合える児童の育成につなげていく。

2 学びを自覚する振り返り

単元において、また、一単位時間においてもどのような力を身に付けたのか、児童が言葉の力を自覚することにつながるような振り返りの場面を設ける。身に付いた力を言語化・視覚化して振り返ることで、自己の変容に気付いたり自らの言語生活に活かしたりする。そのことにより、児童自身の学びの自覚を育むことができる。

IV 研究・検証方法について

研究方法として以下の二点を取り上げ、児童の変容より研究内容の検証を図る。

- 1 授業を記録したプロトコル及び映像を基に分析を行う。必要に応じて PDCA のサイクルに基づく改善授業を行う。
- 2 分析結果に基づいた改善授業を行うことで分析の妥当性を検討する。